

山 峽



豐羽中學校

作文

大宇宙

吉田 浩一

人間はたえず好奇心を持つものである。その一つに宇宙がある。宇宙に行つてみたいといふ望みは、今も昔も変わらないようである。千九百六十二年、人間は初めて宇宙に第一歩をしいた。たゞ月に人間がいつたまごのことである。大宇宙々々見ると、ほんの針の先よりちつほけなことである。

宇宙は無限だという。でもぼくはどこかに終止符があると思える。ぼくが初めて宇宙は無限だと聞いた時の印象です。今、考へても頭が混乱します。

人間はちつほけな生きものだ。そのちつほけな生活にまけて自殺する人もいる。アキスをする人、スリをする人、大宇宙から較べるとまったくくだらない話だと思つすみにかくれて生きるより、宇宙のように広い心をもつて生きよう！！

卒業

渡辺 夕美子

三年間通つた学校。楽しいこともあった。くやしきこともあった。楽しいときには笑ひをみせ、くやしきときには涙もみせた。そしてはやく中学校を卒業したいなあと思つたこともある。でも卒業するといふ実感を味あつて始めて、いやな気持ちになつた。もう一度中学校生活をやりなおしたいような気もする。でも卒業すればそんなこともなくなると思ふ。新しい道が待っているのだから、私はそう思つて卒業し、新しい道を一歩一歩、自分のために進んでいきたいと思ふ。



三年間で得たこと

岡 克則

三年間の思い出の中でいろいろなものがあった。特にふだんの生活の面にあらわれていたと思う。クラブ活動はまじめにしたことがなかった。ほく自身かあさやすく、おちつきがないからだと思う。学習面では、得意な科目についてはよくやすか、不得意な科目は無受カになつてしまつた。このことが、三年間の学習成績がのびなかった原因だったと思う。中学の三年間で得たことは、できないこともすてないで無気力にならず努力すればできるよふになること、うことを得たと思ふ。

長内 刃心

三年間をう、いろいろなものがありまじた。やはり心に残つたのはクラブ活動です。みんなより二、三ヵ月早く入つた私、入つてすぐ中休退だった。そしてその後に私の練習が始まつた。いつしようけんめい先達事にあそわつた。練習の後の

水のあけしき、また味わつてみたいものだ。そしてやつと二年になつた夏、クラブの後にはよくアイスクリームを食入て帰つた。練習の成果で、補欠になつたとさういふらしいのでいつたらなかつた。

そして三年、やつとレギュラーになれた。始め背番号八番だったが七番にされてしまった。その日は悲しくて泣いてしまつた。ひじようにくやしがつた。かえられたのもくやしがつたが、もつと努力しなかつた私自身に腹がたつてしようかちがつた。

だから、私は高校に行つてもバレークラブに入つて人一倍頑張るつもりだ。勉強も三年間あそんでばかりいたので成績は下がるばかりだつた。高校も人生の第二步、この一歩にこいのないようにしましようけんめい頑張らう。

豊羽 にきて

伊藤 賢治

豊羽にこえます思つたことはすてい山の中に豊羽という町があるんだなあと思ひなんたか度な気持ちになつてきました。

よくこんなところで生活できるものかと思った。羽幌も山に囲まれていて豊明みたくはない。鉄道もあつたし、大坂べりな所だったとは何かとこもない。でも、約三ヶ月間生活してみても、はじめて豊羽について考へる方も変つてきた。(だいたいなれたせいもある。)

学校のことには、まず三年生全員が高校に入るというからおどろきました。やはり札幌にあるからかと思ひます。せめて、みんな合格してほしい。そしてみんな高校に入つて頑張つてほしいと思ふ。ほつとも卒業してかつ、いろいろな職業訓練をどうして一生けんめい頑張りたうと思ふ。

一つの思い出

長内 利昭

三年間の思い出といふとたくさんあるけれど、その中でも特にというは、修学旅行だと思ふ。ほくは毎日森で生れたから、ほうとうは、北海道のいろいろなものを見たかつたんだけど、学校でまわつたんだから、しかたがない。でもみんなといつしよに青森や秋田を見るのは初めてだからいいや。それに初めて見たところだつてたくさんあつたからたのしい修学旅行だつた。

佐藤 礼子

入試が終わつてあと一週間足らずで卒業。みんなとは小学校の時からのつきあひ、別れることであること悲しい。

いろいろなことがあつた。泣いたり笑つたり、一年の時なんか、三年の夏が、あつた。大失敗して先生に大目玉をくらつたこともあつた。

調理実習の時、はしゃいでかきられた。テストの時などは、負けまいと頑張つた。みんないい思い出ばかりです。

三年間の思い出はつきません。いつまでも、みんなとの友情を大切にしていきたいと思ふ。また助け合つて行きたい。

三年間のクラブ活動

山石 田 寿彦

一言で言つるとあまり年々しいものではなかつたと思ふ。技術面の練習よりむしろ体をきたえる方に重きをあつた。冬前が一番おもしろくつた。腹筋はたしかについたし、多少かまひすることもあつた。でも本当に満足はしなかつた。

試合にも負けた。しかし試合にまけたことの第一の原因はやっぱり精神面が未熟なことを気づいた。どんなことでもやはり気持ちかたいたしと思つた。入試にしても別に上がることもなく受けれた。それこそクラブでの練習やいくつかの試合にわたる経験が多少強い精神をつくることのできたことの結果だと思つた。

これから中学に入る人はクラブ活動とできるならば最後まで続けてもらいたいと思つた。というのにはクラブ活動で作りおけるものは精神面、第二に技術面、第三に中をやめるということは意志の弱い人間のするところ。最後までやりとげることに意義があり、それによって強い精神がつりあはれていくのだと思つた。クラブ活動と勉強は両方しないとよく言ふ。でもそれには反対でクラブに入つて両方させようとかんはつた。でもかんばかりがたりなかつた。カモしれないから、まぐいかりが。でも不利な事はあつた。不可能なことではない。やればできる。努力もした。といふ気持ちを持つてクラブ活動はあつた。と思つた。

豊井 豊樹

中学校生活が終つて、高校生活に入ろうとしていろいろ思ひかえして残念なことを、頑張つたこと、この力のちあさちあつてはつたこと、いろいろありました。

そして、いぢばん気のついたことは、これからのちあさちあつてはつたこと、そして、

これはは積極性、かけ、あまりにも積極的すぎる。これはからの高校生活において、勉強は勿論を、積極性、精神を固太くすること、代かけようと思ひます。中学は陰謀でできなかつたことは、高校生活で完璧に補う。これがはくの高校生生活への希望になります。



小林 光子

高校入試が終り、卒業式の日が近づいてくる。
水球大会、記録会、スキー大会、学校祭と三年間の学
校生活を心なと共にしてきた。中には小学校の時々の
学校生活を共にしてきた人もたくさんいる。

でも、卒業式を最後に、それをれちがう学校生活を送る
ことになる。なんとなく淋しい気持ちがある。どんなに
ちがう学校生活を送っていても、私は豊羽中学での生活
をいつまでもわすれたい。そしていつまでもみんな
と友達でいたいと思う。

流れ

紙井 典章

数多くの思い出を残した中学校三年間の生活もいよ
いよ弁すところ、一週間となった。この三年間の生活をふり
返ってみると「流れ」というものを感じる。

テニス前だといつても、したくない勉強をいやいやなが
らしたり、運動会だといつてもはマラソンの練習をしたり
そのほかにも学校生活という流れにおしたかされた例
は数多くある。

けっして流れに逆らうべきだというわけではないが、
流れに従がいながら自分の個性をもっと発揮
できたのではないか。今思い返すとくやまれてなら
ない。

校内放送の活動でももっと工夫をこらせばいいものがで
きただろう。ノートのとり方だけでも工夫すればもっと
授業も充実したものになっただろう。過ぎ去ったこと
を振り返ってもどうなるものでもない。

だが、一月後には高校生活という新たな学校生活が
はじまる。全く未知の希望に満ちた生活があたりしく
始まるのだ。新しい出発。今度こそはた流れにお
し流されるのではなく、流れに従いながらも、その中
で個性を発揮して中学校生活以上に充実した果
しい生活を送り、今のよう悔いの残らないように
努めたいと思っている。



ひつこし

佐藤 恵一

十五年間、生まれ育った築港からひつこしするときは非常に不便だったというより、友だちとわかれぬのがつらかった。「みんないけばはかりだったな」と思いつながらここへ来てからあつという間に三月が過ぎた。さてこの勉強もたいふ遅れいたので早くみんなに追いつこうと必死だった。そんな毎日がいやだった。が、今考えてみると、あのときの勉強のペースが入試まで続いても、自分のためになつたと思つた。太中にも五、六人しか友だちが残つていない。他のものはみんなバラバラになつてしまった。千葉、弘島、名古屋などの遠くまで引っ越ししていったものかかっている。よく手紙かきたり札幌近辺の友だちに会うことがあるが、どこへいってもみんなは変わっていきいようだ。「おれだつてあいつらに負けてたまるものか」という気持ちになる。いやいつまでもこんな気持ちでありたい。

三訓

自分が今思ふこと

飯塚 修一

卒業むかへ

友と先生方に、見ようこと

いつまでも、僕を忘れぬよう

だから、僕も

いつまでも、友と先生方を

忘れぬよう、努力する。

これからの高校生活は、今まで以上に困難な生活が待っている。しかし、それは高校を卒業して、社会人になる為の重大な経験として、自分から進んで、困難に打ち向かつて、将来りっぱな社会人となって行きたいと思つた。またクラブ活動も時間の許す限りやってみたいと思つた。中学で全揮できなかつた力を、高校で十分全揮したいと思つた。

時は過ぎる

榊田 ゆかり

朝七時

母が私を起す。

何度かまぶらちにやると目がさめる。

そしてすぐ窓を見る。

太陽がキラキラとまぶしい。

私のほんの少ししかあかない目に

刺激を与える。

ちんどかこんな日が続いて三年

早いなあ。

時がたつのは早い

そしてもう高枝

仲良くやっていた友ともはなればなれになる。

淋しいなあ。

もつと何かしたかったのに

ほんとうになんて短かかったらう。

和がこれを書いている間にも

時は過ぎてゆく。

米谷 義弘

すきやく三年
またくる三年

新しい生活はすぐそこにある

苦い力を発揮するのはこれからだ

中学はすばらしいものだ

だが、二冊からの三年間は

もつとすばらしいものにする

この中学の名譽にかけて。

新しい生活に

われわれはぶちあたる

この命をかけて、ぶちあたる。

新しい長い道を

われわれは、二冊から歩きだした。

頑張りなう、落伍はしないように。

楽しかった三年間

夜会 奈於美

桜の花の散るころに

母とくぐった中学の門

中学生としての

誇らしさと自信にみちていたあり頃

遠足の時は

みんなと手を取り合い楽しく歌った

テストの時は

先生の顔が鬼に見え

苦しいながらも楽しかったクラブ活動

こんな思い出が

きつらぬようによみがえってくる

悲しみを知り、喜びも知り

また知識も深まった三年間

私は改めて叫びたい

楽しかった三年間よ、さようなら

雪

山口 幸二

冬には雪が降る

雪が降ると風が吹くと豊羽は吹雪になる

この豊羽の吹雪といふまに

はくたは大きくわたる

夕になると雪が降る、その雪屑とても冷たい

でも天気のときは雪は美しい

雪は冬の神様

雪は天使、でも冬の美しい雪はせがたさえる

あの美しい雪はどにりくのたろうか

また来年降るだろうか

あつちく美しい雪か

福田 光宏

この一年

ちまじろかった

悲しかった

今、すまじろた

時には

長く

時には

短かくも感じられた

二の二年

また

思い出はのこる

この学校を

この仲間たちを

そして今

新しい時代を

僕たちは

進む

いつまでも。

雪中遠足

佐々木 勇司

楽しく歩く雪の山

疲れを知らぬ歩く者

頂上に来た雄大な心

クラブ

毎日かつらかつた練習

歯をくいしばり

勝利をめざして一致団結し

技と体力を鍛え競いあった。

さようなら

谷津 香

さようならの一言に

どれだけの心がこもっているのでしょうか

さようならの一言を

どれだけ言ったことがあるのでしょうか

人と人の結びつきに

かかすことのできない言葉

さようなら

さようならと言われて

悲しい時もあった

さようならと言われて

うれしい時もありました

さようならの余韻と共に

一つの事が終わり

新しい何が広がる

私はこれからさようならさようなら

の一言を幾度も幾度も繰り返す

大きく成長して行きたいと思う。

かがみ

遠藤 忠

大空
それは、ぼくの鏡
ぼくの姿を写し出す
すみぎった水のように
困ったとき
大空に向かう
大空はおしえる
まるで教師のように
ふと目がさめる
「夢かし」
「ぼくは考える」
「ぼくには鏡がないのだからかし」と問う
「大空はきみにもあるさ。それは友だよ」と
言ったような気がした。
それは、ある晴れた夕方である
うしろには
父がいた。

友よ

木下 敦子

三年間、ともに歩み続けた
友よ。
私は今、その友と別れて
旅立とうとしてゐる。
思い出を胸に秘め
希望を、持ち
未来を夢みて
友よ
みつめていて下さい
私の夢を
私の未来を
そして私の代を。



中村 辰男

あの春

入学に胸をはずませた
みんなが賞賛し喜こんでくれた。

今もう一度しようとする入学

それは 夢を希望と与えてくれる。

桜のつぼみも 若葉も

みんな喜こんでながめてくれる。

そして この春

卒業しようとする今

三年間の短かき思いを胸にいただき
わが母校を去ろうとしている。

幼き頃よ

さようなら さようなら。

矢野目 君子

さあノ 出発だ

苦難をのりこえ

未来をめぐして

さあノ 歌を歌おう

たからかに

声をあわせて

さあノ 力強く歩こう

長い長い道を

栄冠をつかみながら

出発だノ

そして 未来へはばたんだ。

別れ

中谷 絹子

人はきみをこう思う

つらく 悲しく

涙が流れる ものと。

でも 私はちがう

別れのあとには 出会いが

必ずあると 信じていたから

きみを人生の新しい門出と 思っていたから。

私にはわからない

なぜ 人はきみがくるのを 二ばみ悲しむのか。

人よ 別れはつらくない

明かるい未来へ 続く

新しい世界への 出発さだから。

思い出

亀山 誠

まぶしく見える
学校も

私の目から

消えてゆく

別れは悲しい

別れはつらい

のらりくらりと

過ごしてきた

そして色々なことを

感じて

そして成長した

またこれからも
成長するであろう

思い出

弓削 美津子

中学校生活の思い出

それは、今も私にとって

何よりも大切なもの

水晶のように

微妙な美しさをもっているもの

そんな思い出が、今の私を困らせている。

別れを、勇進にして

思い出が、私の心を動かす。

たった三年間の思い出だけで

私の心の扉を、強く、残さるる。

本間 雅子

あの教室、この教室

あの人をして、この人

ひととまたひとと

思い出がうかび消えていく

卒業式、それが三年間の終止符

三年間いけるす年間

一緒に歩み続けてきた友との別れの日

別れを考えるとき

ふとさびしさを感ずる

広い広い野原にたった一人

しまった花が咲いてでもいるかのように

でも、私たちには待つている

明なる日未来が

新しい生活が

新しい友が



あした

佐々木 てるみ

あしたという日は一日きり
どのように過ごそうか
やりたいことはいつぱい
近い一日の中で
どのように過ごそうか。

今まで考えたこともないこと
しかし、これまで成長した
あしたという日を過ごしてきて
なにも考えず
あしたという日を過ごすだけで
成長するならば
あしたという日は成長の土台になるのか。



短歌

別れの歌

横田 則昭

雪空に 口にあんぐり 吸いこんで
思う代は 我道なり
。 熱く燃える 列火の中で
大きく 燃えよう。

いんまでも 白い雲
とまでも 熱い太陽
すばらしい世界 そして地球人
僕らはみんな友だちだ。

宇宙人はいるだろう
宇宙人も思っだろう
熱い太陽と友のことを
そして言う 「再会を楽しみにレ
」グッドラックレ

村上 宏一

卒業式進まずにつれ

思う心はひとつ この豊詞中

三年を思いに思ひ

歌うのはわがなつかしの校歌なり

今歩くこのろろかには

三年のわが足あとがこびりついている。

ぼくと 芽

春。芽がこつ出てける

この芽は三年間も土の中にいたのだ。

地面に出てくるまでは

多くの努力があったにちがいない

今この芽は大きくなることを

ゆめ見ているかもしれない

長かった三年間をすぎ今出てきた

ほくもこの芽のようは

これからも
大きくなることをゆめ見ている。

柴田 広幸

白銀の最後の戦い去りぬかな

雪はむり黄色い声たて人間車

泳ぐ人寒い寒いとかえる声

出発の音と共に走りゆく

箏球で応援声も馬耳東風

夏の日に玉をあいかけ汗をかく



読書感想

志賀直哉著「城崎にて」を讀んで

木下 敦子

この小説は、作者が電車にはお確はされてけがをし、城崎温泉へ養生をしいつたときのことです。作者はそこで三つの事に出会い、それそれと生と死とについて、考えさせられます。そして生と死とは、両極ではなく、それほどに差はないと考えます。

私は、これを読んで、第一に感じたことは作者の死に対する冷静さです。作者は死は静かだ、寂しいものだと言っています。これはほんどの人が思っていることだと思います。でも作者は死に対して、親しみを持っていきます。私だったら、このように冷静になることはできないと思います。私だったら親しみは感じないと思います。いえ、親しみは持ちたくないと思います。私にとっては、死に親しみを感じるといふことは人生に失望したと同じですから。

第二に、作者の生と死とは両極ではないという考え方がです。私も作者と同じ意見です。人間は生きていくうちに必ず、死に直面しなければならぬのです。生と死とは隣合わせて生にはいつも死といふものがつきまとうているのです。だから、生と死とは、両極ではないと思います。

死ぬというところが、静かだ、寂しいものだからこそ、人間は死にたくないと思いはさけていると思ふのです。人間ならこれしも、生さていたいと思ふのは当然です。そういう考えがあるからこそ、人間は生きていけるのです。

私はこの小説を読んで、生きるということをもっと自覚し、悔いのない人生をおくりたいと思いました。いろいろなことを学び、行動して、自分の人生を有意義におくりたいと思います。

太宰治著「走れメロス」を讀んで

横田 則昭

終始メロスが勇者としてかかれていた。一時は悪夢に悩まされ不貞腐れましたが、やはり勇者として最後の場まで前進するメロスとしてかかれていた。しかし、この作品を単なる勇者の活躍として讀

みとってはいけぬ。よき人生の生き方として読むべきだ
と思う。自分が感じたことが三つあります。まず第一
に友情は大切だということ。二つはわがわがらぬ大きな
力にひきずられて走ったとあるように。これは第一
番目のクライマックスです。メロスは自分の心との
闘いの前は、友を救うために、王の奸佞邪智を
打ち破るためとあるが、その後自分の悪夢にうち勝
つた後は、たまた友情というはてしのない宝のため
に走ったのだと思う。また、二つはわがわがらぬ大きな力
にひきずられて走ったとあるが、三つは葉から第三に感
じたことがある。それは、信実を守るということか
いかにむずかしいかということ。この単純なるメロ
スでさえ一時は悩まされたことである。人は自分の
欲する方向へ傾く。ましてや、反対に死という立場
があり、その逆には生という立場があるとき、人もも
はメロスが自ら創った問題であるが、人がごちん
を選ぶだろうか。メロスは死を選んだのです。確実
な死と。メロスは王が自分の邪心にめざめ帰った自分
を許してくれるとはもちろん思ってもいなかった。し
う。それにもましてメロスを死の道にひたすのを許さ
たのは何だったのでしょうか。もちろん第一に、たまた
な友情とそれに信実を許さなければならぬメロス

の正直な心をほらけさせないためにだと思ひます。
第三に感じたことは第三と関連して、人を信じる
ことは最も美しいが勇気のあることだということ
です。二つ目のクライマックスであるメロスとセリヌンテ
ウスが互いにたどりあうところなど、そのよき現われ
だと思ひます。二人は互いに一度ずつ悪い気持ちを
おこした。メロスの悪い心と友人の悪い心とは相反
するものでしたが、それども二人は互いにそれを告
白した。たが互いに敬愛がなかつた。それはやはり
互いを信じていたからだと思います。最後には米
とれるという友人の愛情と、待つていくとれるという
メロスの友人への信頼があつたからです。
二人はそれと度ずつの悪夢を相手のほかに託して
なつた。なんと美しい光景だろう。広い広場に群
衆の中で二人がひと抱き合ふ姿は宗教画のように
ありありとつきでてくる。王ティオニスも二人のふり
の人間として、信じ合える人間として扱つた。王の目
に映つたのは美しい最も美しい信じ合ひだつた。この
よき美しいさを感じるのには信じる心がなければ感
じられないだろうが、王もやはり人の片隅にそれか
かけを残して置いたのだろう。人は本来的に信じる心
を持つてゐるものと思ふ。

生活経験

進歩と調和

紙 井 典 章

大阪の千里会場に六千万人の入場者ぞすいニミ、六月にわたった一九七〇年世界万国博覧会も九月十三日に幕を閉じました。私も六千万人のうちの一人として開幕当初の四月に一週間にわたって見てきました。ここで万国博についての感想を含めながら、私なりにうけとめた考えをのべたいと思います。

日本万国博のテーマである「人類の進歩と調和」は一九五八年のブリュセル万国博以来のすばらしい機械文明の長足の進歩と同時に、一方では矛盾やひずみに満ちた社会を改善する一つの方法として設定されたもので、単なる機械文明の進歩だけでなく人間社会の調和のある進歩によつて豊かな将来をきこころという、未来への夢が、そのテーマにたくこられてゐるのです。

七〇国以上のパビリオンの中で、私が見たのは極くわずかですが、たしかに人類の進歩を象徴するかのようについにアメリカ館の「月の石」や「宇宙ロケット」をはじめ「超音

速旅客機」など科学技術の粋を一堂にあつめ人類の進歩の過程を誇るものばかりでした。その面では私の目を放馬かせ、興味をつうらせてくれるのに充分なものばかりでした。

テーマのもう一つのねらいである「人類の調和」とは何がそれに答えてくれている。パビリオンは残念ながら、私の目にはうつりませんでした。あえて、それをもとめるならば、例えばベトナム館です。国内での戦争で南北との激しい対立とは別に、万国博では民族として共同で参加していることです。もかしこれとても「人類の調和」というより、同一民族としての共存にすぎないと思ひます。

むしろ、同じアジアに住む人間でありながら、主義の違ひから、また経済的方理由から万国博に参加しないという国もあることを考へる時「人類の進歩と調和」は決して万国博という祭典にのみもうけられたテーマでなく現代の世界全体の問題としてとらえなければならぬと思ひます。

フランスの思想家バスキアルは「人間は考へる善井である」と述べたように、人間の頭脳的な働きの中から、科学兵器もつくられました。核兵器を保有する国が、現在世界に六カ国あります。ホタンひとつで世界の終末をむかへる危険な状態なのです。「若し為政者

が邪悪な企てをしたら、と考へるだけでも、巨大な機械文明の進歩は、人間の思考の中からめけてして人間に恐怖をもたらしているのです。「人類の調和」とは、世界の全人類が平和のうちに共存共栄をはかるといっただけでなく、人間に健全な良識と道義をとりもつて機械文明を破壊の道具に使わなため、せいさよ装置を、人間の心の奥深くにささかつけること、たと私は考へるのです。

私は万国博という世紀の祭典を見られたことをこのウエもななくうれしく思っています。かつての東京オリムピックではスポーツをとうして人間の肉体の極限にせまり、記録に挑戦する。そこには、力をふりしぼった人間だけが、つほのほのとした友情があつたにちがいない。万国博はそれと対照的に綿密な計画と緻密な頭脳の中から創造されたものなのです。人間の限りない努力の成果を誇り、国際親善を深めようという面では共通しているのです。人類共通の広場としての万国博は真に輝かしい未来を約束してくれたかどうかは問いません。ただ、一兆円という巨額を投じて六千万人の多数を魅了した万国博を単にお祭りとして終わらせてはならないと思ひます。

みなさん、三洲からも、もつともとなく世界に目を向け

て、また世界の国々についての豊かな知識と国際感覚をよりみかき世界に通用する日本人にならうてはありませんか。次の時代を担つて立つ、私たち若者がこれからはたさなけれはならない役割は何かということをしつかりつかみましよう。

「人類の進歩と調和」を實現させるためにも、私たちは世界の人人々とかたく結ばれ、平和な世界をゆるぎなくこの地上に築くため努力をせねばならないと私は思ひます。



先生のことは

私の哀歎

学校長 高梨 乃一

溪声に明け暮れて三年。

そして、風雪の三年。

卒業、おめでどう。

九ヶ年の第一の人生は終った。

第〇〇〇号の卒業証書を、握り締め

さて、諸君は

何をしようとするのか。

軒氷柱の一粟、一粟。

時を刻んだ一息、一息。

からんどうの教室の隅に、残っている。

あのおかるいささめさ。

その、がっしりした肩に、夢をのせ

ふくよかな胸に、善意を秘め

さらに求めて、校門に消えていく。

アディューター。
悔いなき前進を……

さようなら。

くるしみをごえていこう

高橋 義雄

卒業おめでどう。これで義務教育は終ったこと
にちりやレやレといつた気持でしょう。

一二年の弟妹がまだ学校に通っているのに自分た
けが誰にもとがめられずのんびり過せるこの気持

……でも考えてみるとすぐ高枝にかようことに
なりますね。くるしみはこの時から始まるよう

に思われます。通学ひとつ考えてみても長い時
間バスに乗って遠いとこに通うのはなんとなく

のびのびした自由な気持になつたように思いますが
今ままでならまだおとんの中に居た頃に家を出なければ

ならないでしょう。それが繁しみになるだろう
と想像し実行できたらほんとうに立派な人でしよ

う。でも苦るしくても先輩はそれをつづけている
ではないか。それが通学だけでなくどんなことでも

理由をさがして楽な方に逃げたくなるものです。

どんなに苦るしくてもそれに打ちかかっていく方法を考
えたいものです。どんな苦るしみをもこえていける方
法を……

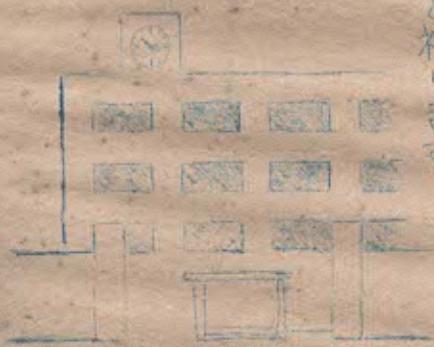
卒業生に

上田 正司

札幌市内でありながら中心より遠く離れた豊羽、
皆さんの生れ故郷、また少年時代を元気に育んで
くれた豊羽。皆さんはこの豊羽の新雪をかき分
けて築立つ日の近い今日このごろ、胸をときめかせ
ながら希望に燃えていることでしょう。中学校卒業
後は札幌市内の高校に進学され自分の目的に向っ
て進むことでしょう。大いに努力して下さい。
さて、私との交わりは、男子は三年生時代の体育授業
での二年のみ、女子は二、三年時代と本当に短い期間
であったが、私なりに皆さんと体育活動を通じて種々
なことにふれ合っただけで、これを深く感謝してお
ります。

野球、スキーの佐々木、中村、村上、柴田、豊羽中
校が金道大会のマログラムの中に入ったのは初めてで、その
大会の上位に入ったのも佐々木勇司君の健闘。札幌中
体連では中村君の活躍が目立った。後輩も皆君達

に負けず頑張りなすことと思う。若田、福田、飯塚その他の
生徒も中体連大会、正科の体育授業中の活躍は他の
生徒の模範となっていた。真剣な授業態度、私
心の中にいっまでも残ることでしょう。女子はバレー部
の中心となって活躍してくれた馬淵、瘦会、本間、矢
野目、柳田、長内の各選手。二年生時代より中体連
選手として活躍し、豊羽中学校の名を高めてくれた。
ち創さんのスパイクは市内大会で高く評価されていた。
この力をたれなく進学後も活躍していただきたい。
ソフト部も佐々木、谷津、小林、佐藤の各選手も部
の中心になり上級生としての役割を果たした。
何事にもクラス一にまっとうで参加していた卒業生の
皆さんに比より卒業のお祝いをのべさせていたさま
です。豊羽中学校の思い出を大切に大いに努力される
ことを祈ります。



卒業生のみなさんへ

鎌田 敏糸 人

美術の最初の授業のことを覚えていますか。みなさんにみつめられて、(特に女子)よってしまい、何を話したのか今でもわかりません。きっと、あまりにもいい男だったからみつめられたと、勝手に解釈しています。これから、いろいろ困難な壁にぶつかることがあると思います。壁と平行に歩るくよりも、壁を必死にのり越える闘志が必要なものもあると思います。でも、疲れたら、時々、中学でやった美術でも思い出し、スケッチや絵の鑑賞などはどうでしょう。明るく元気で頑張ってください。

先生から中學生への感想

後藤 政勝

現代の中學生の年頃はテレビやマスコミによって知識が多くなり先生のいうことに理屈をつけて反発する。それはそれでよいが、先生のわるい面をとりだして、そして生徒の有利な面のみをとりだして議論する中學生が多い。私は悪い面をたくさんもって理屈を言うのが下手なのでしばしば彼らに論ばくされた。

しかし、ある日彼らが明らかになんかしていないことをして、校長先生が注意したくらいすぐやめるものを私が注意してもやめないで逆に私の悪いことをいつてくる。その時の彼らの気持は分らない訳でもないが、それが他の生徒や授業に与える影響を考えているかどうか疑問です。すべての先生が校長先生のような立派な先生だったら問題は無いが、私のような先生がいる限り生徒がとるべき態度には充分注意すべきである。それは生徒のプラスにもなる。

若い諸君

三浦 克樹

君達の前途には
ビルディングのような
暗い大きな壁

君達の前に
鬼のような
おそろしい顔

君達の前途には
太平洋のように
広いはてしな道

それに向かう君達は
仁王のようにたくましい君達

太陽のエネルギーを
全細胞の中に蓄積している君達

豊羽の雪をとかし

春を到来させる君達のエネルギー

ソクラテスの

アイニシユクインのまうな

頭脳を持っている君達

そのエネルギーと頭脳は

君達のヘッドライトになるだろう。

君達の前途は

君達のカで

君達の若い力で

君達のかしこい頭で

素晴らしい未来を

作りあげること可能だろう。

君たちのエネルギーを

タムのように

たくわえたまえ



君達の頭脳を
コンピューターのように
たくわえたまえ。

卒業に思ふ

園田 周之

君達が入学した四年三月四月、私もこの学校へ赴任して来ました。君達と同じように新たな気持ちで学校生活に入り、共に喜びも悩みも重ねて、私は豊羽の生活に慣れ、君達は大きく成長して卒業していただきます。

共に過ごしたこの三年間、教員の時間では苦しみの方が多かったかも知れませんが、しかしみんな良く努力しました。学習の効果は上がったと思っております。

今年は何年とちがいが全員が進学するわけで、高校で学ぶ新鮮な知識やものの考え方を充分身につけて、時々母校に立ち寄っては、豊羽の校舎が環境に慣れた下級生に、新しい息吹と刺激を送り込んでほしいと念願しています。

佐藤 経子

いくとせを学びし校舎に
鳴り渡る 時を告ぐる
鐘の音も淋しき あした
新しき門出と知れど
くちずさむ別れの歌を

教師生活と私

白石 仁昭

私は教師になって十五年の生活をおくった。
私は教師として「居間にある母の眼が毎日、
毎時その子の精神状態のあらゆる変化を確実
に彼の眼と顔とに読むことを要求する」。よろこぶ
どももの心をよく察知し、理解できるようにしようと
努めた。また私の専門の教科についてプロフェシヨ
ナルな面で子どもにいきとどいた指導と信頼される
ように努めてきた。これからも研究を積むことに
よって教師の本分を果したいと考えている。
この十五年間に、卒業生を送りだすのが五回目
である。最初の卒業生は二十六才になり、女子はま

婦として首尾に専念している人が多い。二回目の
卒業生はいまも正月にはクラス会をもち、二十名
前後は出席する。顔を合せるたびに、社会人として
の経験をおとらせ、教師対生徒のかきわけもどりのぞ
かれ、酒をくみかわして談話でさるたのしみかまし
てきた。これも教師であることの利得と思おう。
私はある卒業文集に詩をかいたが、いまながし
く、こころにもかきとめておく。

存在―たしかなもの―

君ともおわかれた。
あの幸福だった時代の
ありとあらゆる想い出を
君のうちに
おいてもめるのだが、
そのかんげさが
うせたいまでは
君の存在ほど
確かにうっしてくれない。

いつの日にか
君の彫刻にうちこんだ
あの机の上の
数々の記念のことはに
ことよせて

すぎにし傷心な青春を
うつろな心で語っても
君の姿をみれないのなら
ま遠くにあるを
はげ知らせるだけだ。

当時の私の感傷的な気分を率直にのべただけに
なつかしい。十五年目の今、君たちを送る。昭和三十
年代の好況と平和の中でうまれ育ち、平穏な生活を
してきた君らかうおやましい。敗戦の虚脱
状態の中で、必死に耐えて中学校生活をあつた
私の当時の生活とは比較にならないほど幸せであ
る。しかも、全員が進学するなどということは、これま
での経験しなかったことであり、それだけに、君たちは
過保護に育ち、精神的なまろさを散見する。
中体連の対外試合、高校入試など、そのどたんばで
実力以上のものを発揮できずに終っているのは、精
神的虚弱の好例だと思ふ。実に悔いの残る結
末である。これからの君たちに要求されることは
肉体以上に精神面での鍛練こそ肝心である。
そのきするところは、決して鈍感な感動とは、
人間になることではない。その逆で、繊細なま

感受性と不動なまてな太い神経を同居させること
である。一見矛盾しているが、しかし、自信をもつ
て行動するには、不可欠なことである。また、自
信の背景には、どんな欲をほどに吸収できる柔軟な
頭脳のもちぬしであってほしい。

人間は自分の歴史を自分で作る。だが、これを好きに
勝手に自分で選んだ情勢の下でつくるわけでない。
現に自分の前にある与えられた、それまでに出来
上っている情勢の下でつくるのである。私たちは
現に、歴史の存続者として生活を歓喜し、未来
を指向している。将来において、私をふくめて君た
ちは、
なる。

教師である私の使命は、その新しい時代を創造
する人間として、君らの可能性を引きだすことにあ
ると考える。その過程で、ひとりひとりの生活を
充溢させること、民主主義精神を体得した社
会人を育てることなど、より社会の電光石火を
つとめ、
つとめたい。